へ13
3692
11

門へ13
號3692
巻11

曲亭翁原稿　西馬老人綴

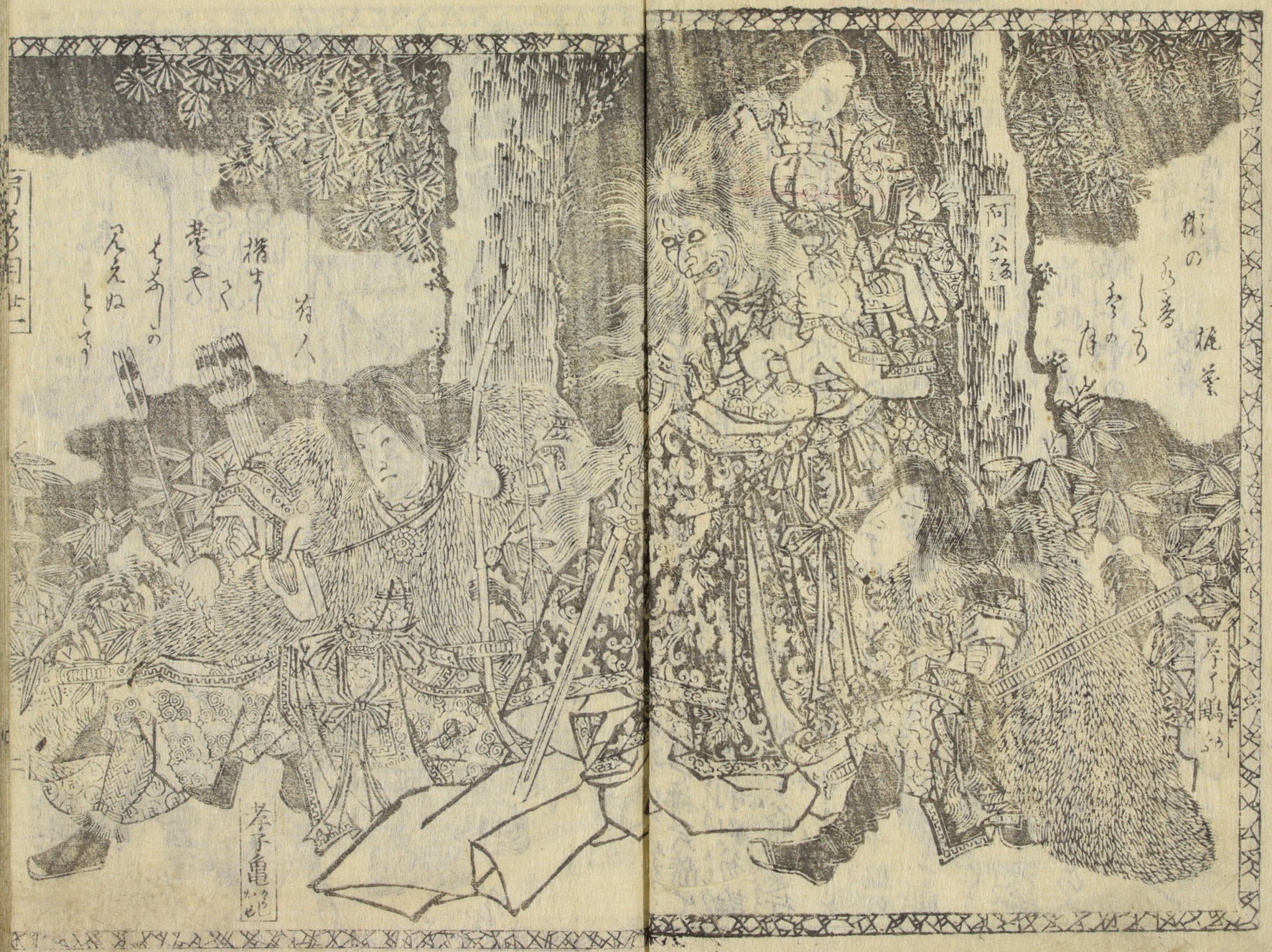
閑談

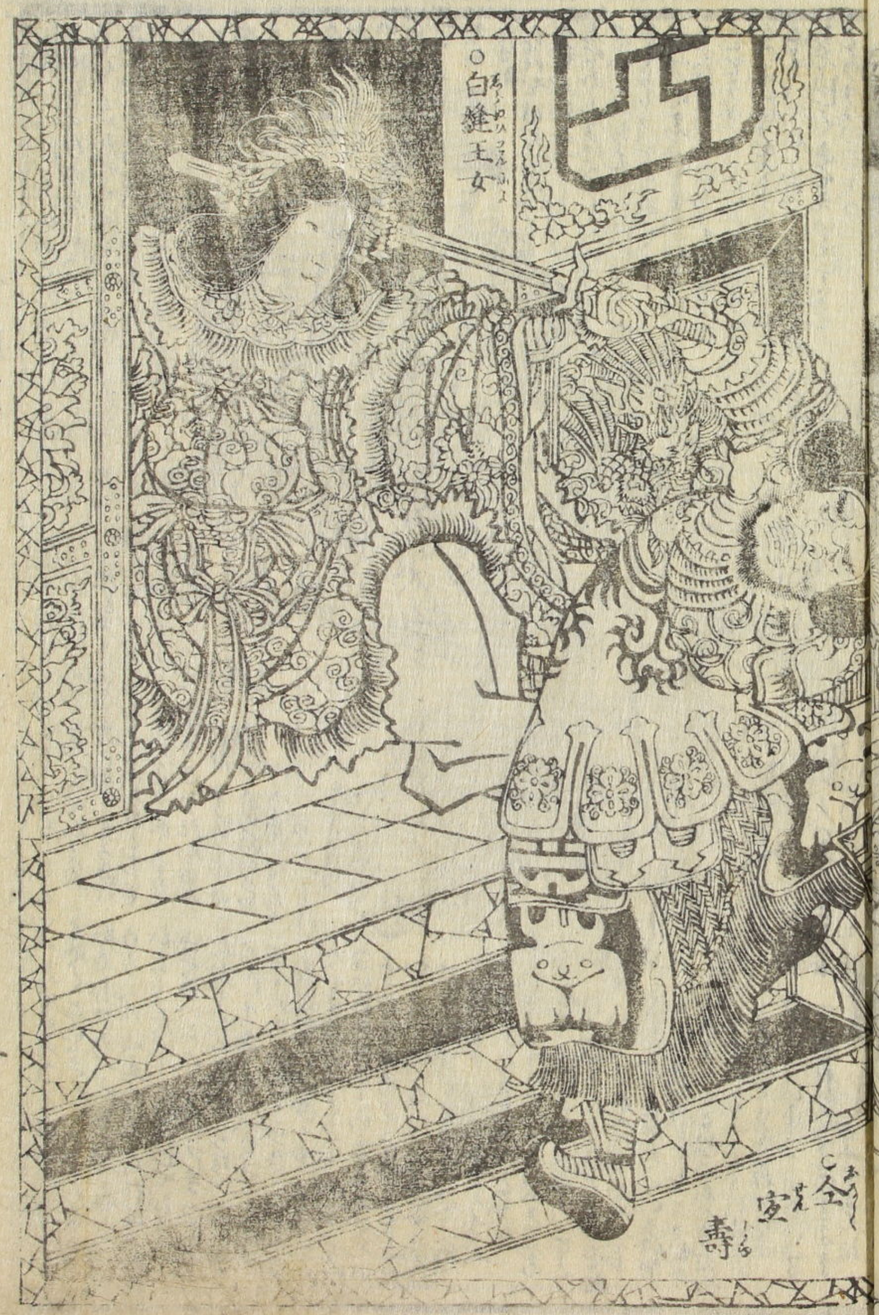
東京書房　文昇堂熊谷梓

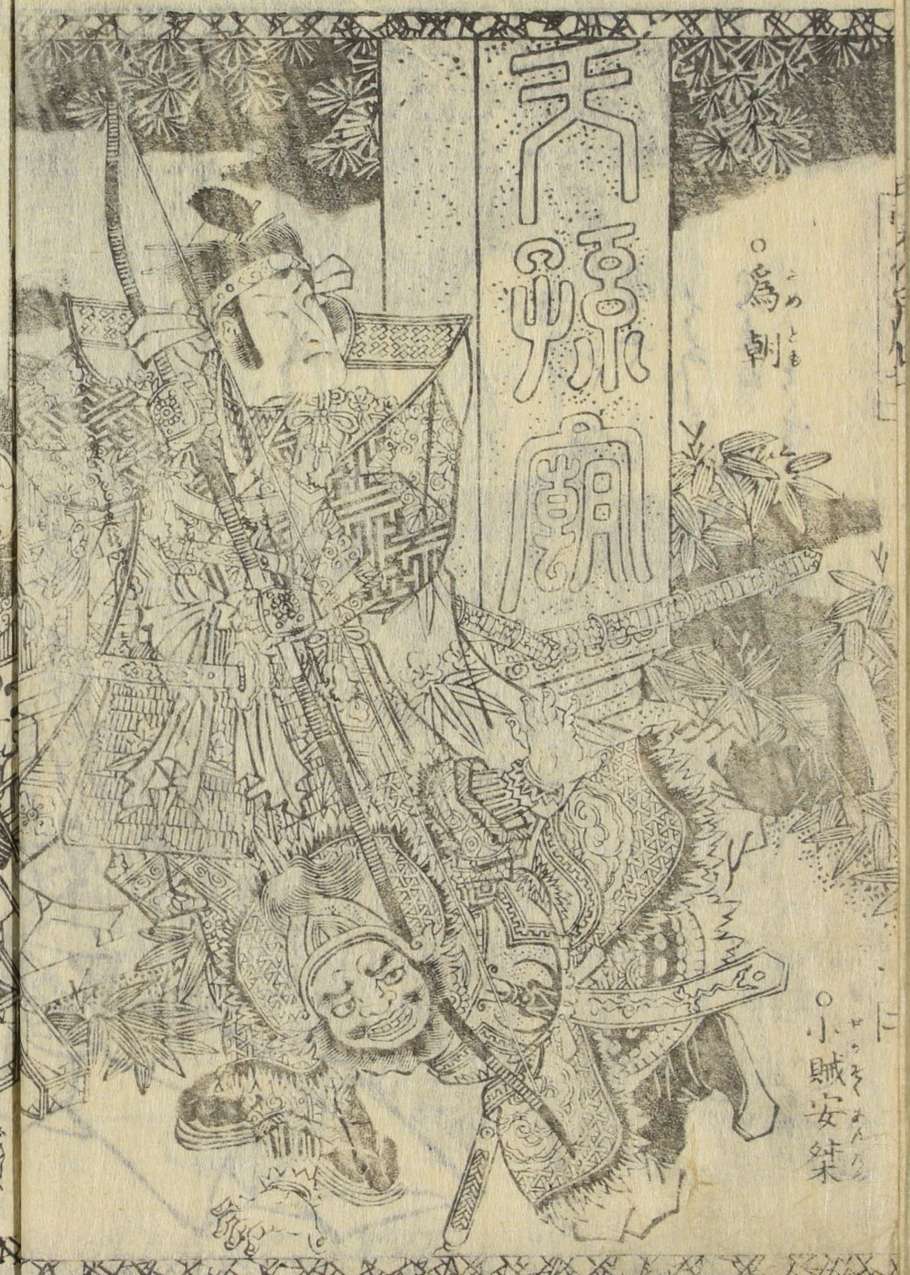
古人曾いへる語あり。書を校するハ掃葉と塵壒の如く。隨て拂へハ隨て積る。それハ有用の正史の條にて果敢なれ草紙物語ハ備書剞劂ハ勿論にて作者ならして謬錯だらけ。況此書の鈔錄者。樂亭爺ハ遠行せられ遺稿を探求して次輯に充まバ。扯撰ハ殊に多かる中に甚しきにいへるなり。それハ十九編下の巻なる。二丁目より以下の文を二十編の閑讀より同下の巻三丁目なる「[illegible]」といへる文まで同條を再度備書の手に物せり。莫遮剞成發の後に心附たることにしあれバ今更容易改正ぐらく悔めども其甲斐なし。依て次編の發兌を急ぎ。前板二重の麁誤を補ふよそがとなせるといふ。申訳の口演を錦昇堂の主人に代りて

文久元年
辛酉季春

校者　假名垣魯文述




○白縫王女
○全宣壽


天鳥朝
○爲朝
○小賊安桀

為朝

紀平治

松壽

舞天丸

白縫王女

紀平治

烏とも

松壽

辰平

松事吋

松壽

玖馬

松壽

蛾宗

松壽

千歳

千歳
松壽

西馬綴

芳虎画

甲橋
千歳
丁袖
丙烈
丁炎春

末小八
乙油
丙烈
丁炎春
甲七七
撫夫

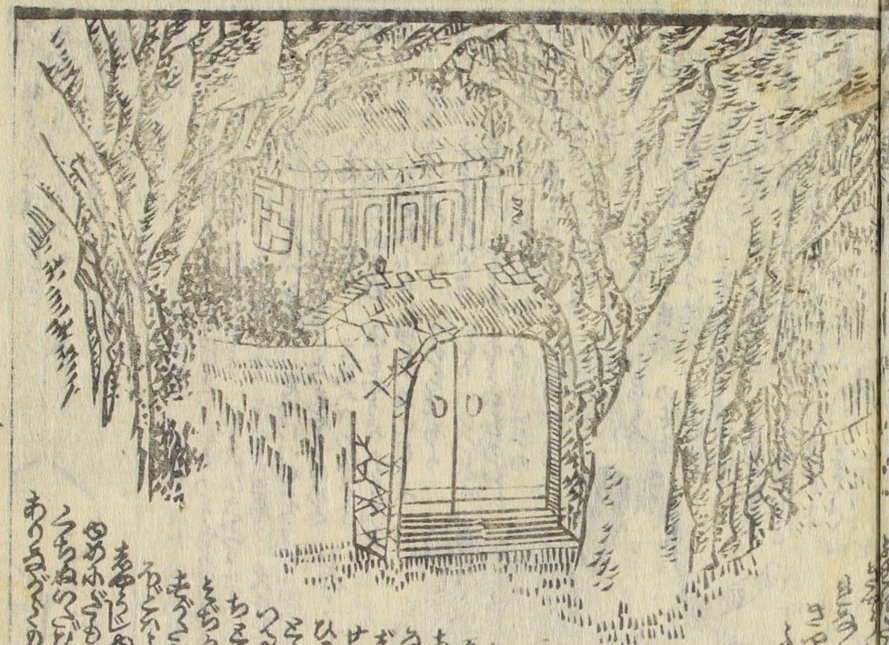
甲橋
真鶴の夏
撫人

紀平治
松壽
舜天丸
白ぬひ王女

紀平治
甲橘
丁炎春
申大七
末小八
丙烈

四
爲之助
松壽

孝子亀

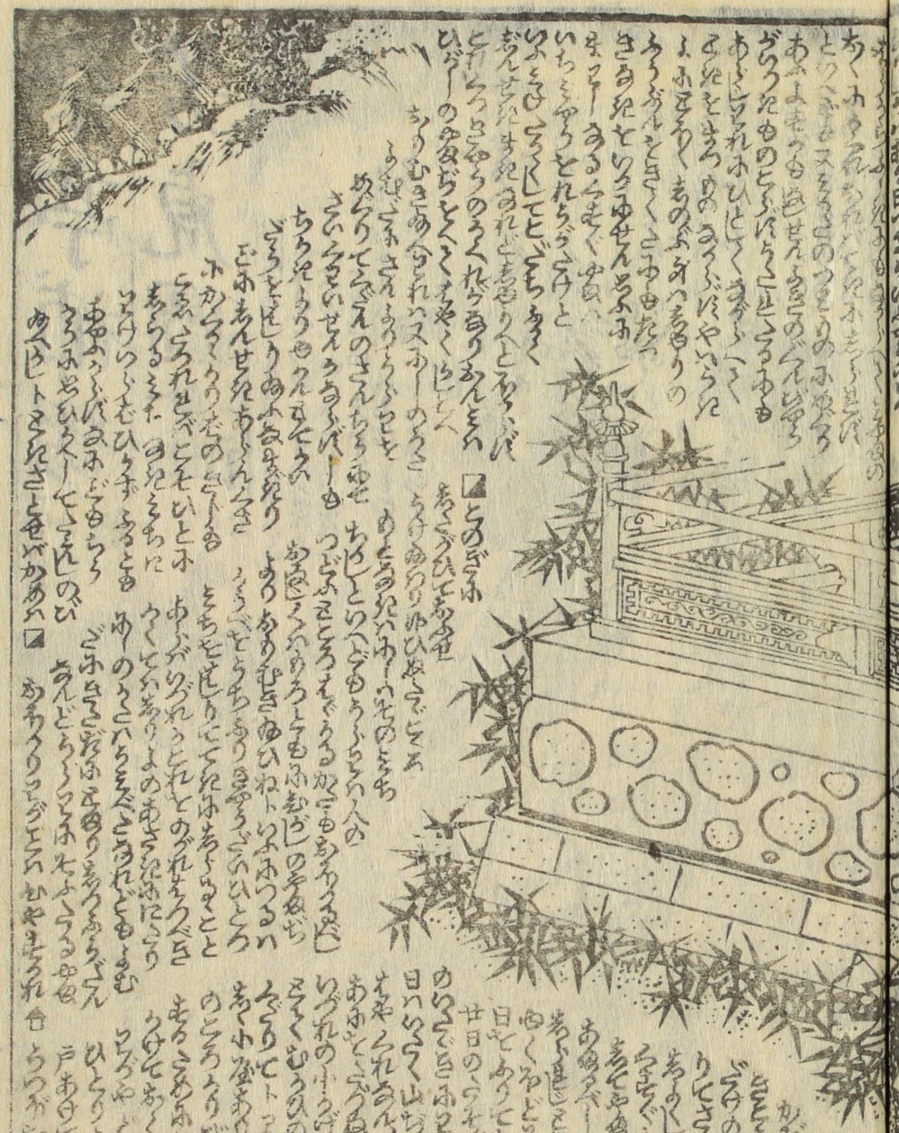


孝子鶴

孝子鶴

王子

孝子鶴

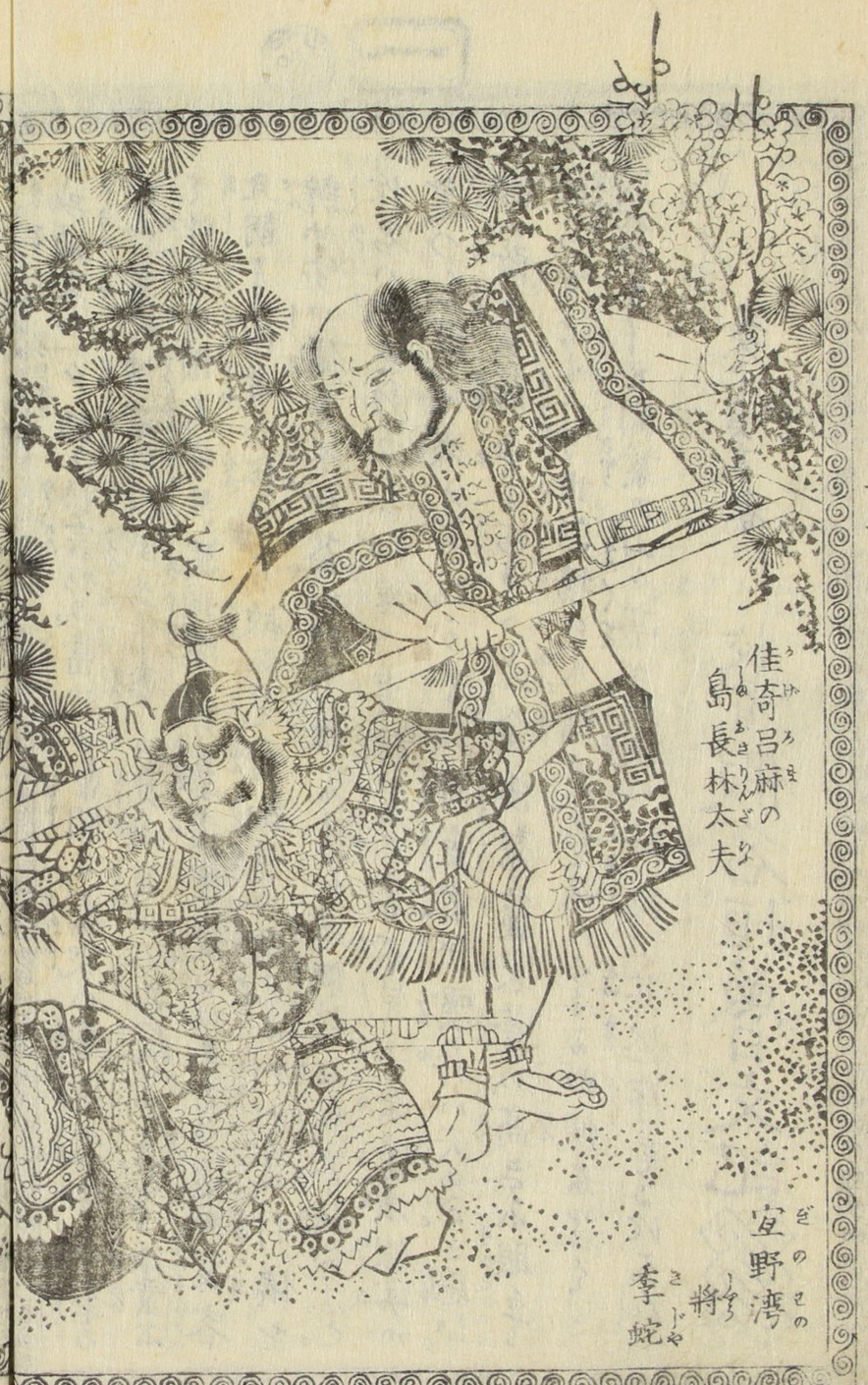


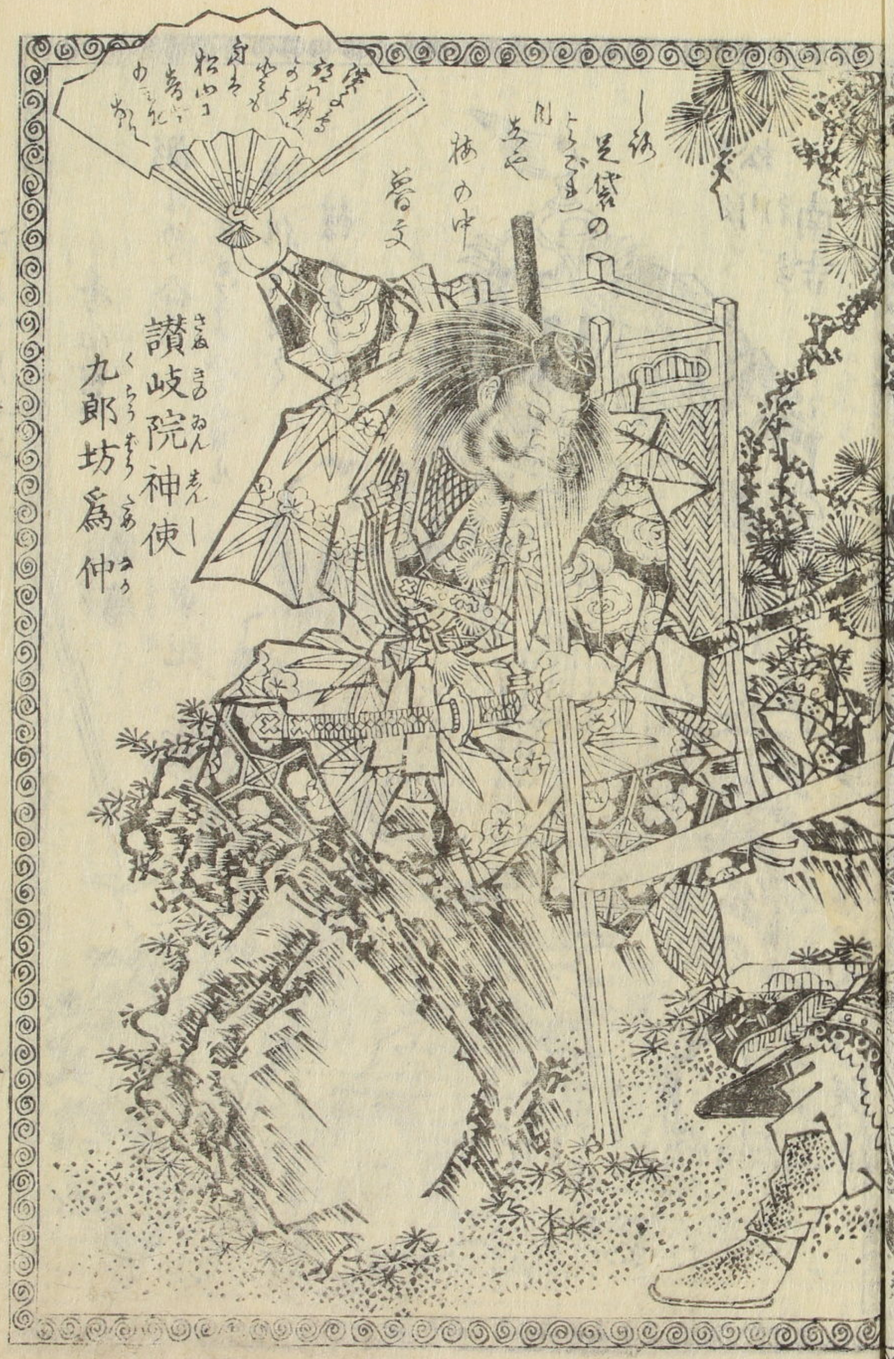
樂亭補綴芳虎圖畫

或通客の一夕話に拾言あり。當時の幇間に。富家の零落者なく。今季の戯作者に。博識の潦倒なし。委皆身過渡世乃。たつきにものをる活業にて。昨日の日傭夫。今日は黒羽織の。男藝者に變るあれど。夕辺の食客。且朝より作者と化るあり。故に見番細見の。題名に列れども。行儀を辨ぜず口儀を不知。茶ハ好く雅ハなれ木偶坊。且何亭何ごとと。作名は記されども。和漢乃叓跡は夢にも不見。手尓遠波假字は楚つち退。元來ありあがすなる稗宦者流雲井は天のみと思ひ。鄙は弥生の節會とあきらめ。金襖翠簾家臺の。高きに眼をつけ。はこのすとも。一寸世話場の人情さへ。ちゝ語の少ぐこのぬ便なきたとも。一笑ありしを同業乃。山々亭が取次の談話を其侭序せるにあん

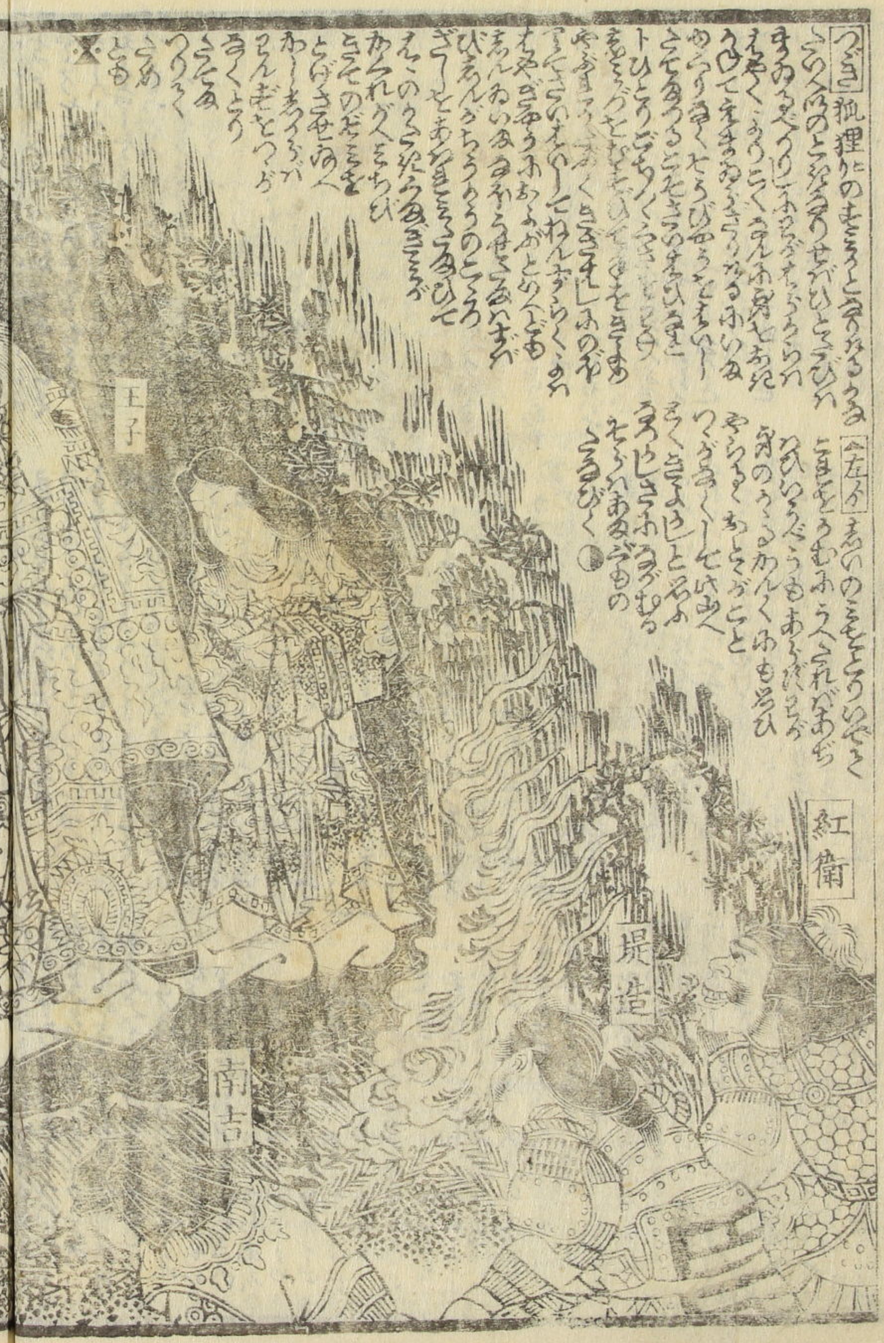
文久三癸亥ノ春

校者 假名垣曾文記


佳奇呂麻の
島長林太夫
宜野湾
將
季蛇

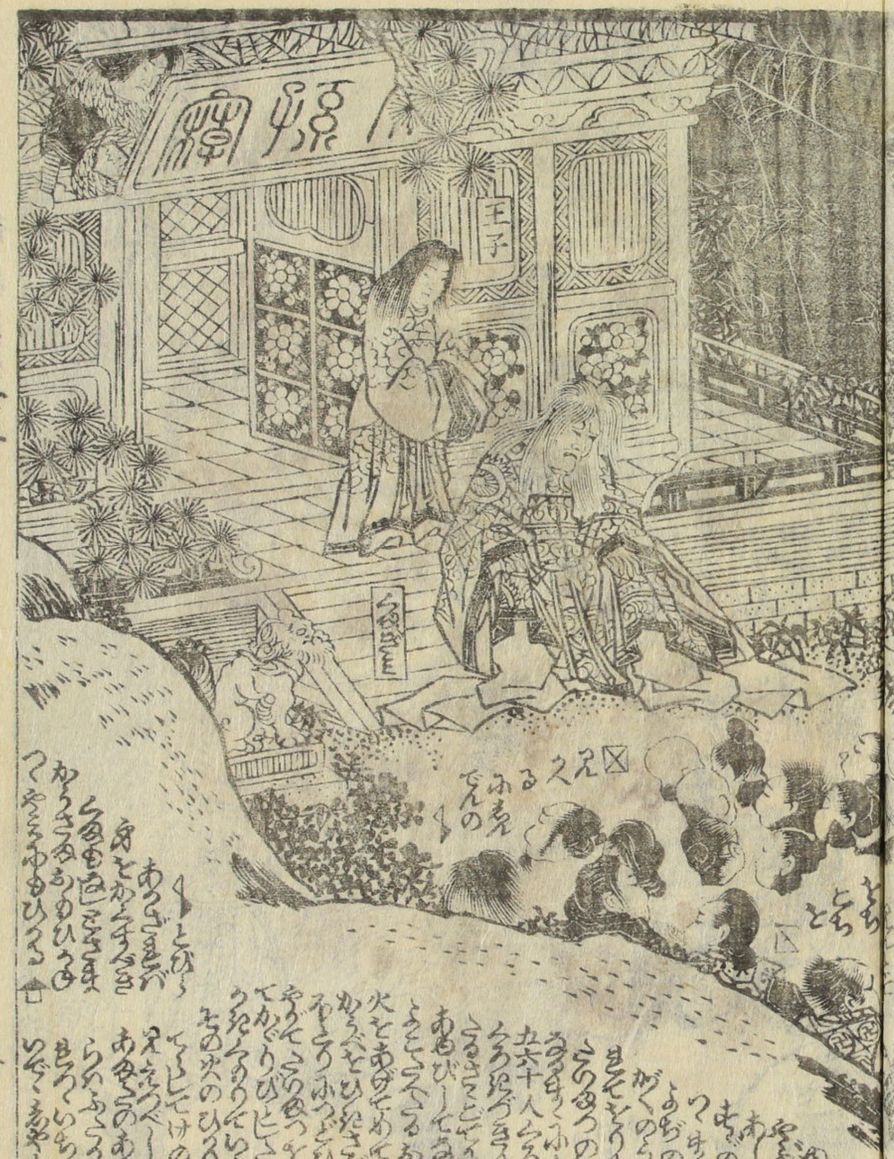

讃岐院神使
九郎坊爲仲

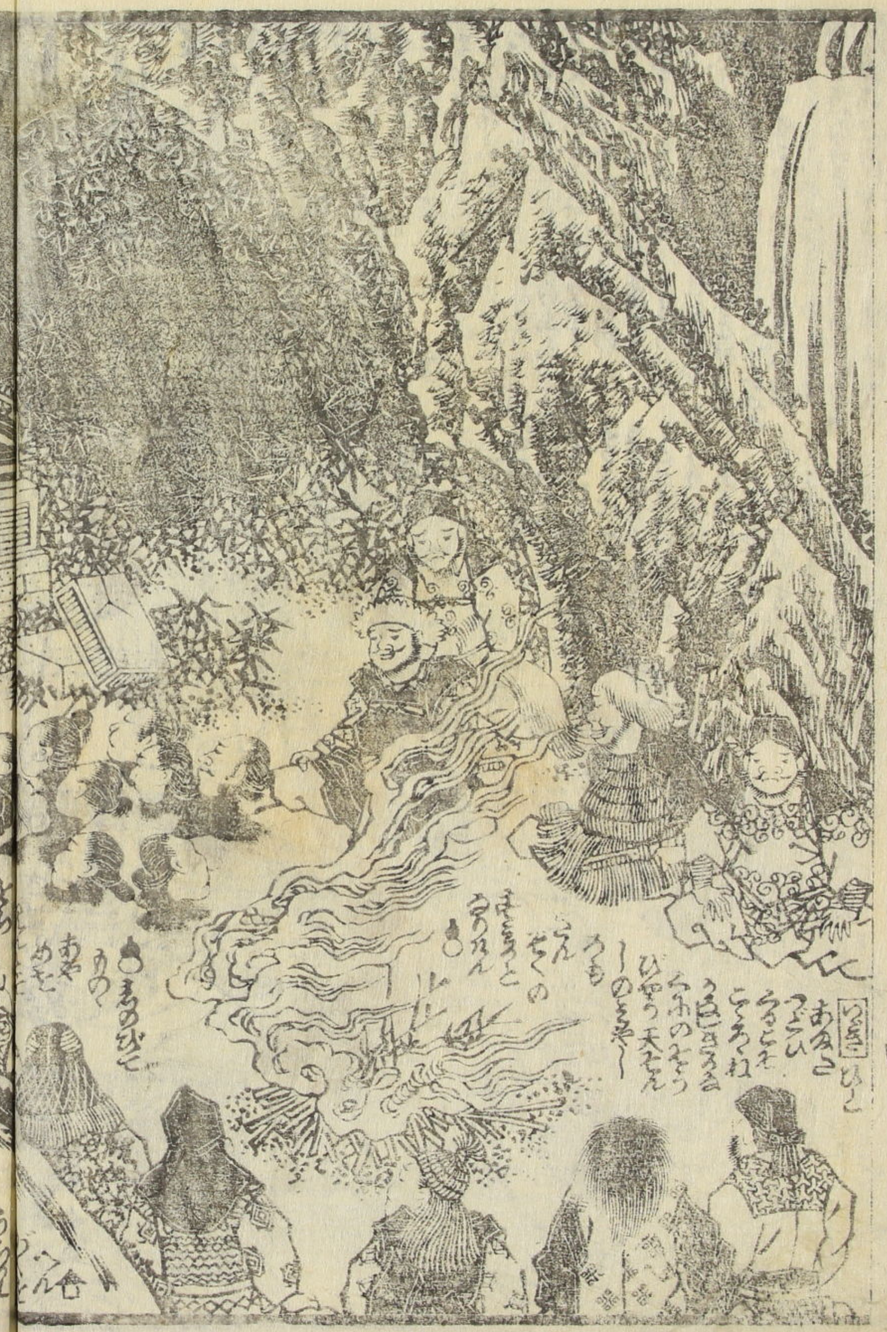
香以賀
彫りの命
忘れてる堂の日ル
仁和をぬく
鰹の友とち
○國場東紀
○松川南吉



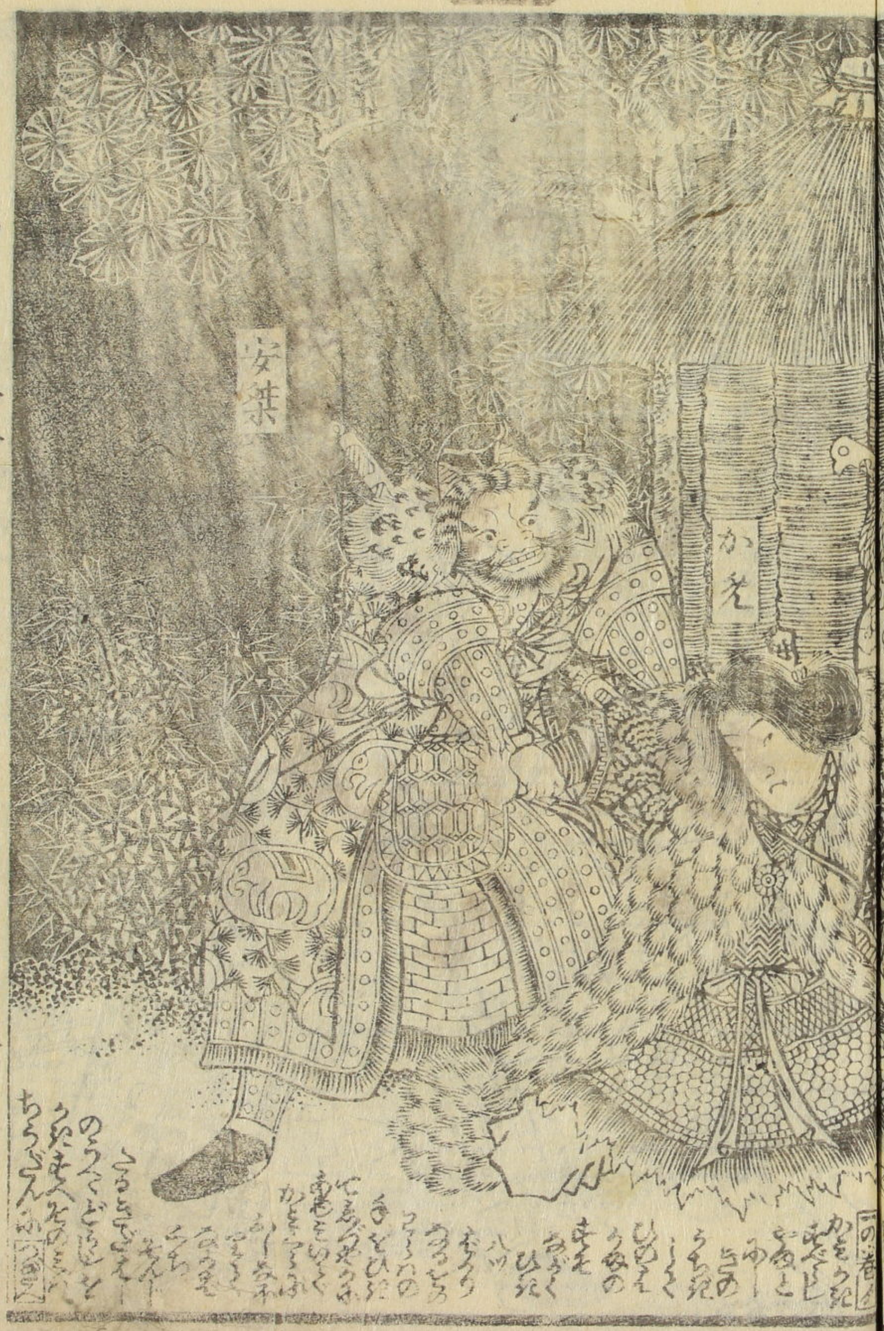
[つづき] 狐狸たのもうと云ふ事なるべし [左へ] あいのこをとろいのぞく
こまをとるむふうくられがあぢ
ひいろぐうもあらばくらぶ
身のうるかんくゆもそび
やらるくもとそ
つぐるくしやせ
そくさよと」とそふ
うひむるぐもの
そうびくく

[右へ]

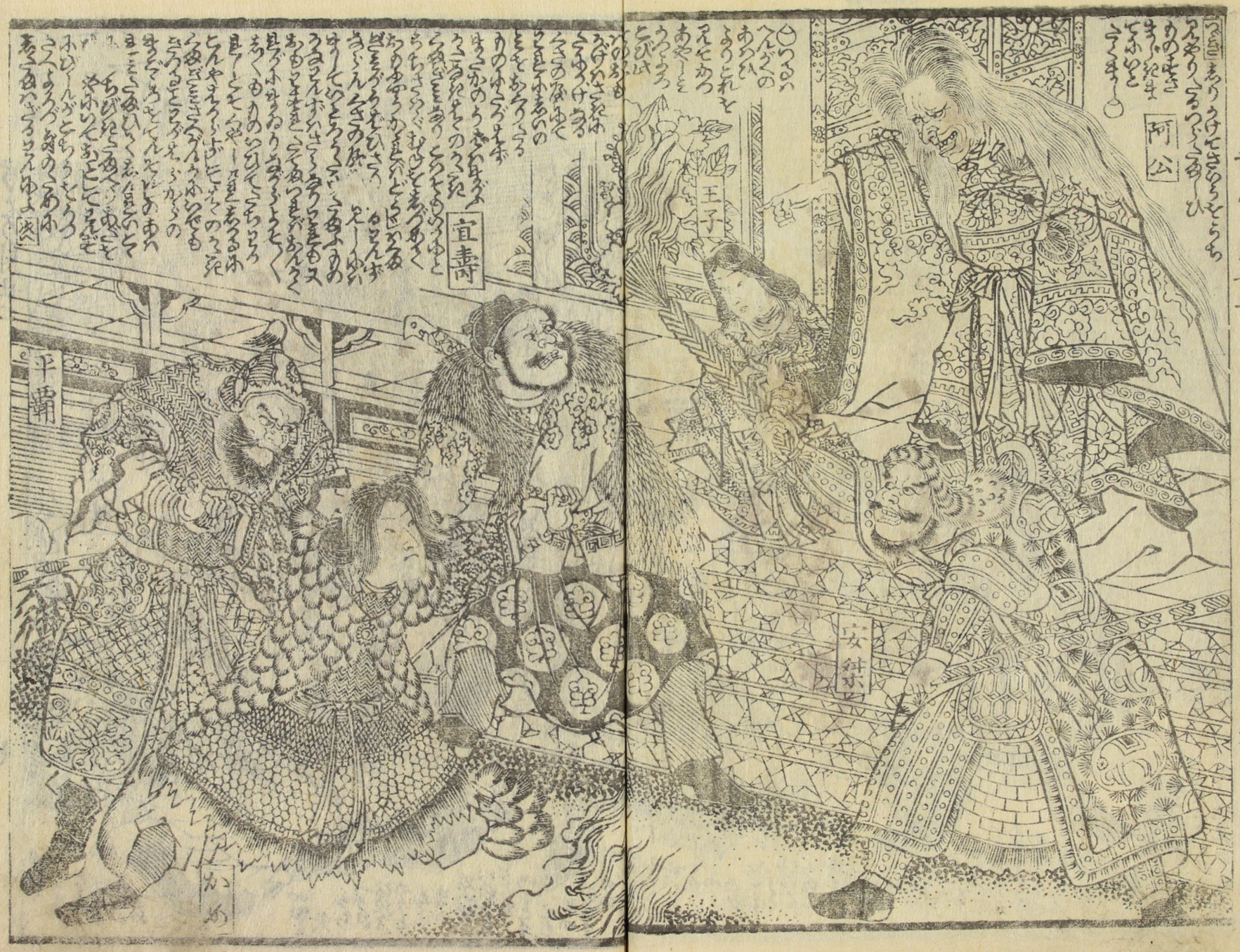


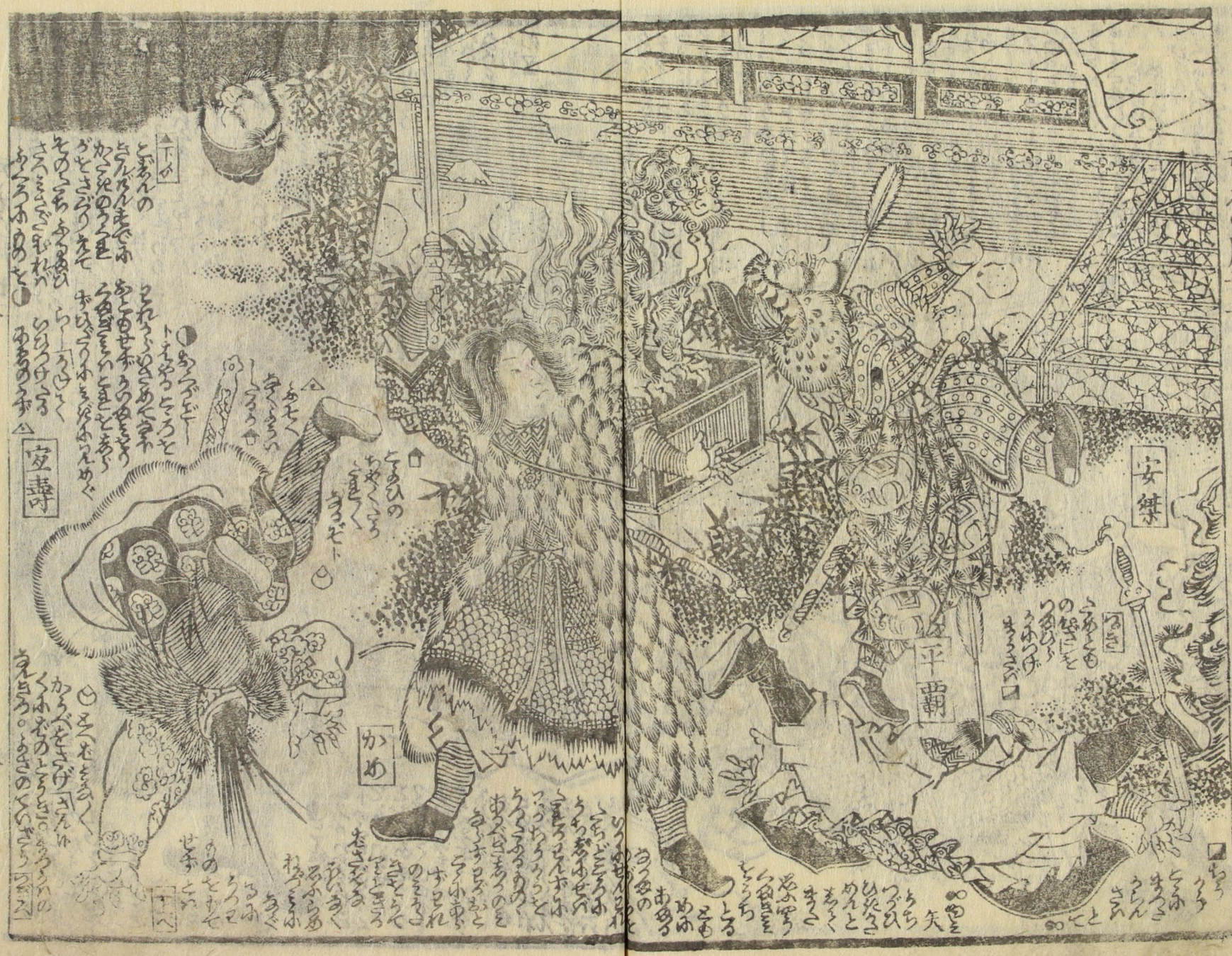


あげく　うちうえ
ものづをとうえ
ふとみづしゆ
あゝをとうけく
ものをふゆまう
つゝすぐさのうふ
よものゝりうく
がくのうーふうく
まそをうさるわとゆ
うのゆつのひうちつく
ゆうゆうふあゝをととら
九六十人ろうえをゆふ
ろうえづきんをゆうで
うるさことでふ木のうえの
あるびーてゆうえうを
よとこえうるあのくゆんでふ
火とあげてゆめうふいひとの
かうえをひえさけとひうの
そうろうふうえひろろ
やうてうのつをうちかさゆ
てかぐりひとしてまえそう
うえゝうろそいうとうえられど
そのえのひうふいおうを
てしてけのあうえうゆ
それゝべーそのとう
あゆうのあゝをとを
らのふうろうふゆあが
もつていらゆんむまて
いうぐうゆもひうる


安楽
か光

安壽
平朝


阿公
王子
安桀
宜壽
平覇


安樂
平覇
かめ
安壽

かめ

つゞき やすざとのとうあ○つく山のふいえ。
ゆうおまのぎす○こうくうのあれくろを
はゆうてしちをくうまべく六十ゆん
めのをうくうまそうびくとくと紀
をとうくうりんまのをうくうけをさあ
うくあくとうくうくものくさうくびめ
たぶさをつくんでさでこれのりとふ
きうくぶまびあをくのとし
うさもーとうぐをくのとし
つけこうきうこびのうぶれ九
八十一るるかひとろくうぐうれ
りくわぐやうりこそいいれ
がひるーふぐりいりとと
とふおこそるうろみ
びとよーのひとう
せがをるりろとるふ
うくべそうれ
三月二く四五
日のぜんとう
まうくーの
えぐまむう
いさくく
うりる
う川
の

かめ

中め かんえくうそあ
とろさいるとれいかぐ
つきうきうめかうべを
えのくをもやの
のうこをもうや
るとあこと
そうく
うけ
こあ
りん
や

こんのまうくいやをれいこ
ーのこまくかうべ
とうりゃもる
とこあれきうる
つくきくひのりと
ゆるねのきの
うくべそ七十あゆう
ゆえいこまる
ぐんどありいる
とのゆあもそれ
ゆいとくゆん
おんくうのぎ
とうくさが
りあくそんぐ

阿公

○けの
まえを
そんおの
いくぐあと
争ゆふ
ゆくうのこれ
ゆくくのまれ
ゆくに八十一の
えふ
ひとろうみ
そうふ
ひとろうふ
とこととと
とふ
あよぶ

ちをぬべる
えの
百ゆの
あうべべ
きうくうろー
あまろーと

いる

一千六代の
のをあさ
りてうる
ぞくのうあ
おせを
うまあ
せまる
うまる
さんまん
のあれ
あこを

つる
阿公
王子
かめ

西馬遺稿 芳虎圖画

つる
阿公
王子
かぞ

王子
阿公
つる
か兎

紀平次
舜天丸
阿公
つる

王女
松壽
為朝
かめ

紀平次

河公

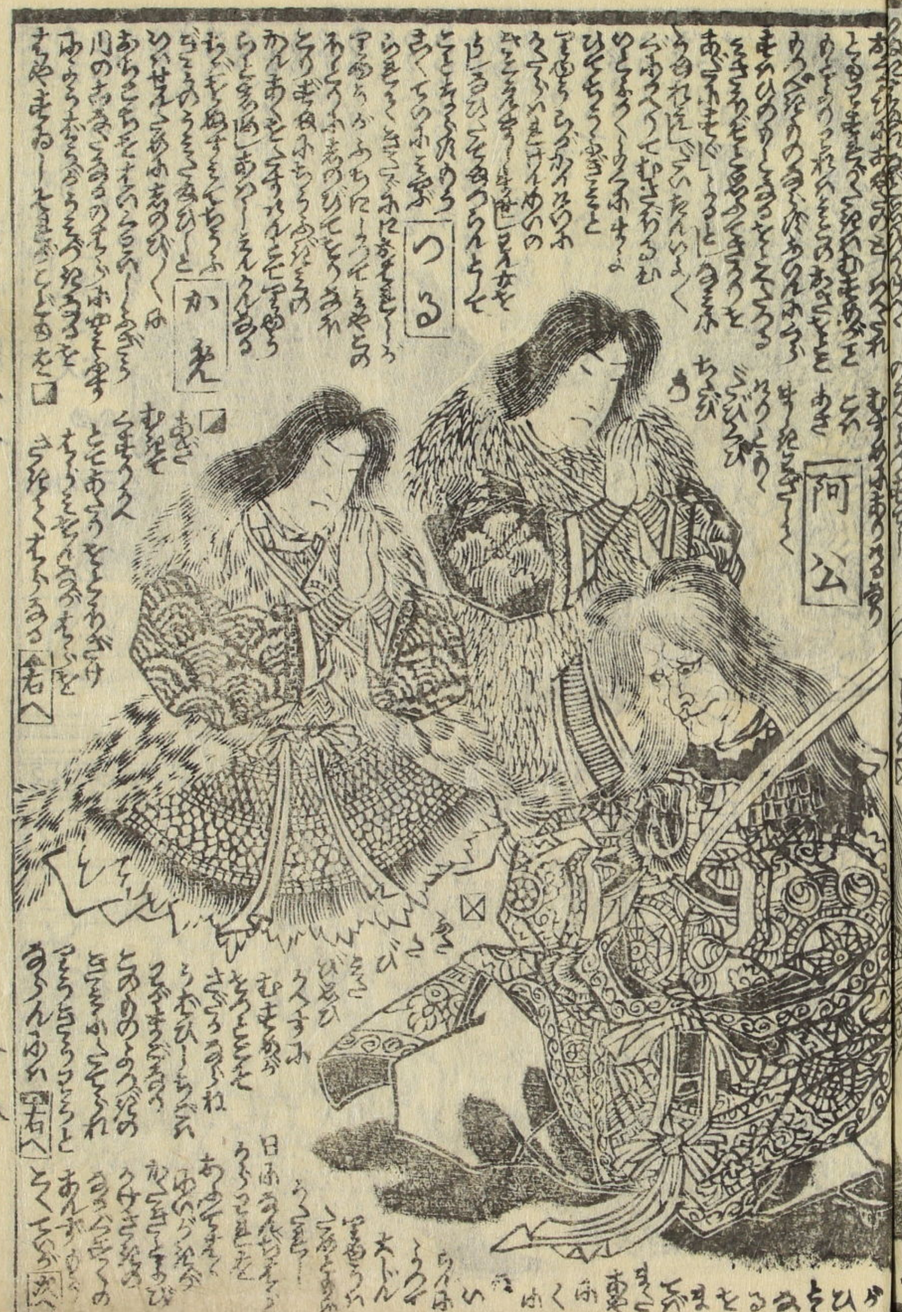
此画の形象は四十余年以前阿公
日本に渡海巨肥後國阿蘇明神の
社前に於て一個の武夫と契を結べる
趣にして阿公が話説にのぞうり

○此武夫の本名廿三編出せり

酉歳
月吉辰
敬白

舜天丸
つる
阿公
かぞ

紀平次


阿公
つる
かぞ

紀平次
爲朝

玉女
天七
松壽
かめ

安桀
かえ

松壽
つる
宣寿
平覇

魯文校合

樂亭西馬遺稿

一猛齋芳虎画

備書交來